

『クリス・クリストファーソン』と 『アンナ・クリスティ』の比較

大川 哲男*

The comparison between *Chris Christophersen*
and *Anna Christie*.

Tetsuo Ohkawa

はじめに

Chris Christophersen は1919年に書かれ、ジョージ・C・タイラーの演出でニュージャージー州のアトランティックシティで初演されたが不評で、1920年3月26日フィラデルフィアにおける上演で最後となった。この間19回上演されたのみであった。この原作を書き改めた物が *The Ole Davil* で1920年に書かれたが上演はされなかった。そしてその上に書き換えられた劇が *Anna Christie* であり、アーサー・ホプキンスの演出によって1921年の11月2日に初演された。この劇は大変好評で177回上演され1922年にはピューリッター賞 (Pulitzer Prize) を与えられた。①しかしオニール自身はこの作品よりも *Chris Christophersen* の方を個人的には好んでいたようである。つまりオニールにとって人物としてクリスの方に強い興味があったわけである。Travis Bogard によればクリスのモデルは実在しており、オニール自身それをインタビューの中で認めているという。彼はこの劇の人物と同じように海を憎み、海から去ろうとしたが他に仕事を見つけられないので barge captain (平底の荷船の船長) の職についていた。陸に上がるといつも Jimmey-the-Priest's saloon に行き、そこでオニールとも知り合ったという。しかしあるクリスマスの夜、船に戻る途中海に落ちて死んだというのである。②この人物の海への憎しみにオニールが興味を持ったのは明らかであり、それが次作の題名 *The Ole Davil* にも表われている。この論文では *Chris Christophersen* と *Anna Christie* それぞれのプロットや登場人物の変化について調べてみようと思っている。以下では

便宜上、*Chris Christophersen* は *Chris* とし、*Anna Christie* は *Anna* と省略する。

(1)プロットの変化

2つの作品とも大まかにはプロットは同じである。どちらのクリスも海を憎み、そのため今では海にも陸にも属さぬ(と自分では思っている) barge captain という職についている。*Chris* はそのことについて次のように言っている。

It ain't sea or it ain't land eider. Barge ain't ship no more dan coal vagon is ship. Dat's why Ay like dat yob. (p.18)

そのため娘アンナが船員と結婚しないことを願うが、皮肉にも *Chris* では二等航海士のアンダーソンと、*Anna* では汽船の火夫であるバークと結婚してしまう。

しかしいくつか違う点がある。まず大きな違いはアンナと男達が出会うそのきっかけである。*Anna* では、アンナとクリスの住む barge に嵐で船が難破したバーク達が助けられる。*Chris* では反対に彼らの住む barge の tow rope が切れて霧の中に漂流している所へ、アンダーソンの乗った汽船が来てぶつかり、アンナとクリスの2人は無事この船に助けあげられる。Travis Bogard はこの船の衝突は、*Chris* におけるピカレスク的な面であると言っているが、③これが *Anna* においては削られている。次に見られる違いはアンナとクリスの恋人マーシィの会う場面である。この女性は売春婦でありクリスは娘に自分とのことを知られないように苦勞する。彼女とアンナが会う場面は *Chris* ではクリスの住む barge であり、気転をきかしたマーシィは物売りの振りをしてアンナが船にやって来ると同時に出て行くだけで、2人の間に会話は無い。しかし *Anna* の方では2人はジョニイの酒場で会

*宇部工業高等専門学校英語教室

う。この酒場がオニールの若かりし頃たむろしたという Jimmy-the-Priest's であることは間違いない。この場面でマーシィは back room の family entrance から入ってくる。女性が堂々と酒場の表口から入ることはできなかったのであろう。Chris の方では、ジョニイの酒場にはこの back room がなかった。マーシィとアンナはそんな所で会う必要もなかったのであろう。なぜならアンナは教養ある女性で売春婦などではないからである。ところがアンナが売春婦として出てくる Anna では、酒場で2人の似た者同士が会うということは大変効果的であったと思われる。酒場で女性が酒を飲むこと自体墮落した女ということを観客に知らせるからである。

(2)登場人物について

Chris は Anna よりも長くまた登場人物も多い。(Chris は Act One-Scene 1, Scene 2-Act Two-Scene 1, Scene 2-Act Three-Scene 1, Scene 2, そして Anna は Act One, Act Two, Act Three, Act Four という構成になっている。)2つの作品で共通する人物は Act One の酒場のシーンで登場する酒場の主人のジョニイとバーテンのラリー、2人の沖仲士、アンナからの手紙を持ってくる郵便配達人、クリスの愛人マーシィ、アンナと結婚するバーク (Chris ではアンダーソン)、そしてクリスとアンナである。ジョニイについての描写は2作品とも一致しているが、Chris の方がそのせりふが多い。そして Anna が表面的なのに対して Chris ではクリスや客との親しい関係が感じとれる。ラリーや沖仲士、郵便配達人においてもほとんど違いはない。マーシィについてはその描写に少し違いがある。

Anna では次のように書かれている。

Her figure is flabby and fat ; her breath comes in wheezy gasps ; she speaks in a loud, mannish voice, punctuated by explosions of hoarse laughter. (p.139)

このように売春婦らしく太って粗雑な性格の女性に描かれ、また男性のはく大きなプロガン (作業用革靴) をはいてその滑稽さを強調するなどコミカルに描かれている。しかし Chris では次のような描写も入っており、少しだけらしのない女性となっている。

Her big mouth is thick-lipped and droops laxly. Some of her teeth are missing. (p.29)

Chris ではマーシィはクリスの barge の中で登場してくるのに対して Anna ではジョニイの酒場に出てくる。そし

て Anna ではアンナと話をし、彼女が売春婦らしいことを観客に知らせる意味で重要な役目を果たしている。また Chris ではアンナはマーシィと話もしないし、彼女がクリスの知り合いということも知らないが、Anna では逆になっている。つまり Anna ではマーシィはアンナとの関係において重要な役目をするようにされている。Chris におけるマーシィはクリスとのユーモラスな関係にのみその役割を果たしている。

バーク (アンダーソン) やクリス、アンナについては後で述べるとして以上が共通の登場人物であるが、Chris ではこれに加えてジョニイの酒場の客ジャックとアダムズ、同じく客としてやって来るミッキーとデブリン (ミッキーは昔クリスが甲板長をしていた頃その下で働らいていた)、クリスの船が衝突した汽船ロンドンデリー号の船長、その一等航海士ホール、船員のエドワーズとジョンディ、食堂の給仕グラスが登場している。Anna にはバークと一緒に難破した船から助けられた船員 (3人) やクリスの船の甲板員ジョンソンが登場してくるがほとんどせりふもない。このように Anna は登場人物の数も少なく、また内容的にも縮めてある。例えば Chris ではミッキーやデブリン達とクリスの会話が約9ページにわたっており、その中でクリスが昔ネプチューン号という帆船に甲板長として乗っていたこと、彼の一族のほとんどは海で死んだことなどが話される。ミッキーはクリスが甲板長をしていた頃の部下であり、彼が優秀な甲板長であったことを知っている。それ故彼が今は barge の船長をしていると聞いて驚ろき、彼らと一緒にまた帆船に乗ろうと誘うがクリスは拒む。ミッキーの友人のデブリンは少し頭のたりのない男らしく、ミッキーの言葉の間に短いせりふを入れる。例えば次のようにミッキーのせりふに相槌を打っている。

Mickey: Devil take you! Who'd think it—a fine, smart sailor man the like of you doin' the like of that! On a rotten coal barge! Hell's fire!

Devlin: (Drunkenly quarrelsome)

A damn rotten job, I say, for a sailor! (p.23)

上のせりふからもわかるようにミッキーはアイルランド人であるが Anna のバークほどのアイルランド臭さはない。また Chris の Act Three, Scene 1 はクリスと船員仲間のジョンディ、エドワーズそして給仕のグラスの会話の場面であるが、こういった場面は Anna にはない。こ

ここでは彼らがクリスにアンナとアンダーソンとの仲を告げ口して、クリスが不安に駆られナイフを持って出ていく所が重要な場面である。特にグラスは2人が結婚の約束をしていたと嘘を言ってクリスを刺激する。*Anna* ではクリスは人から聞くのではなく、パーク自身からアンナと結婚したいということを聞く。そして2人の格闘となる。しかし *Chris* ではクリスはアンナとアンダーソンの話を盗み聞きするだけで結局争いはない。それだけ *Chris* のこの場面の方が迫力に欠けると印象を持つ。次に主要な登場人物についてそれぞれ述べる。

①クリスについて

彼の描写は *Chris* では次のようになっている。

He is a short, squat, broad-shouldered man of about fifty ... his light blue eyes peer shortsightedly, twinkling with a good humor. His large mouth ... is childishly self-willed and weak, and of an obstinate kindness. His heavy jaw is set an angle denoting an invincible stubbornness. A thick neck is jammed like a post into the heavy trunk of his body. (p.10)

このように人の良い、頑固な人間としてユーモラスに描かれている。*Anna* においても同様であるが、あごの描写は抜けて頑固さが薄れた描写になっている。彼はスウェーデン人であり、彼の一族はほとんどみんな船乗りであった。そのため彼は他の者から square-head(スカンジナビア人に対する蔑称)と言われている。彼のせりふはかなり標準英語から離れている。以下その例を挙げてみる。

1. to 不定詞を使わない。

(例) It make you happy marry dat Irish fallar,
(*Anna* p.245)

2. 関係詞を使わない。

(例) You gat fallars on deck don't know ship
from mudscow. (*Anna* p.216)

3. for の誤った使い方

(例) Ay don't vant for her gat yob now.
(*Anna* p.145)

4. スペリングの変化

(1) [θ] → [d] (例) other → oder

(2) [d ʒ] → [j] (例) just → yust

(3) [w] → [v] (例) whisky → visky

(4) [b] → [p] (例) by jiminy → py yiminy

(5) [θ] → [t] (例) think → tank

(6) [d] がなくなるのがある (例) old → ole told → tole

(7) 間投詞の多用

Py yingo, py golly, py yiminy, py Yo, By golly,
By yiminy crickens など

これらのスペリングの変化の中で3と4は *Iceman Cometh* におけるウェットジョン(元ボーア義勇軍)と共通し、1や5はロッキー(バーテン)と共通している。

④

彼は昔帆船の甲板長をしていたが、今は石炭を運ぶ平底船の船長という低い地位に甘んじている。これは前にも述べたように彼の海への憎しみから来ているのであるが、この平底船は自分では動かず蒸気船(steamer)に引張られて動くからこれは海にも陸にも属さないという彼の言葉から、我々は彼が belong できない人間であることがわかる。*The Hairy Ape* におけるヤンクは自分が属し、そして生きがいを感じていた火夫(stoker)の仕事捨て belong する場を求めてきまようのであるが、このクリスはヤンクのような若者と違って年寄りであり、belong する場はないが古き良き昔を胸にいだいて生きている。そういう意味では *The Hairy ape* における老火夫パディに似ている。パディは昔をしのいで次のように言う。

Oh, to be back in the fine days of my youth,
ochone! Oh, there was fine beautiful ships them
days-clippers wid tall masts touching the sky-fine
strong men in them-men that was sons of the sea
as if'twas the mother that bore them. ⑤

そして彼は今の汽船の生活が自然と切り離された生活であると批判するが、これは文明社会への批判でもある。*Chris* におけるクリスも次のように言って汽船を批判する。

All is steamers now-damn teakettles. Dey ain't
ships. (p.22)

彼が汽船に乗らないのはそうした気持ちが働いているのであるが、これはオニールの文明批判を反映していると思われる。*Long Day's Journey Into Night* におけるエドモンドの有名なせりふ⑥もクリス達の考えと共通している。海にも陸にも属さないクリスは自然と切り離され belong する場のない現代人を代表していると言えるだろう。こういうクリスと対照的なのが *Anna* におけるパークである。パークは汽船の火夫で自分の仕事に自信を持っている。そういう面では *The Hairy Ape* のヤンクの火夫でいた頃と共通している。パークはクリスに対して大いに批判する。

You've swallowed the anchor. The sea give you a clout once, knocked you down, and you're not man enough to get up for another, but lie there for the rest of your life howling bloody murder. (p.215)

これと対照的に *Chris* におけるアンダーソンは始めクリスと似た人物として描かれる。彼自身2等航海士になった時自分も“船乗り生活から足を洗った”(I swallowed the anchor the day I became second mate p.135)と告白する。

クリスの海への憎しみ、そしてそれと矛盾する海への愛着は両作品において変わらない。これがオニール自身の強く表現したかった点であろうが、*Anna* ではアンナの方がドラマチックになってしまっただけでその点は薄れた。Normand Berlin は *Anna* はリアリスティックな面(売春婦としてのヒロイン、アンナと父親のlove-hateの関係)とシンボリックな面(海という運命に翻弄される人物達)の両方を持っていると述べている。⑦このクリスの海、そしてそこから発生する霧に対する憎しみは彼の運命(オニールの言う“behind-life”)に対する抵抗である。しかし結末でアンナが海の男と結婚し、自らも再び甲板長として海に出ることになったのを見ると、彼の運命への抵抗は終わったようにも思われる。がしかし *Anna* における最後のクリスのせりふはこの結末が単純なハッピーエンドではないことを思わせる。

Fog, fog, fog, all bloody time. You can't see where you was going to, no. Only dat ole davil, sea-she knows. (*Anna* p.271)

この結末について John H Raleigh はオニールがこの劇を“Comma”と呼ぶことを考えていたと指摘している。⑧まさにこれからまた新しい運命が待ち構えているのである。この *Anna* における結末に較べて *Chris* における結末のクリスのせりふは、対照的に海の悪魔性は認めながら運命に従順に生きるというまことに単純明快な物となっている。

Dat's your best dirty trick, ole davil! Eh, vell, you gat me beat for sure dis time. Ay'm ole fool for fight with you. No man dat live going beat you, py yingo! (p.146)

このラストを見ると *Chris* の方がハッピーエンドで終わっているようである。この点で *Anna* の方が *Chris* より優れていると思われる。

クリスの海への憎しみはどこから来ているのであろう

か。それは1つは彼の心の弱さを正当化するためであると言える。クリスはアンナに海に出たままスウェーデンの妻の所に戻らなかった理由について次のように言っている。

Ay don't know, Anna, why Ay nerer come home Sveden in ole year. Ay always vant for come home end of every voyage. ———buy Ay never gat board ship sail for Sveden. Ven Ay gat money for pay passage home as passenger, den-Ay forgat and Ay spend all money. (*Chris* pp.47~48)

The Long Voyage Home のオルソンもこれと似た事を言う。⑨彼の場合は故郷(スウェーデン)で妻や子供が待っているわけではないが、母親や兄がいて、兄と一緒に農場を経営しようとししばしば言ってきている。そしていつも帰ろうと思うのだが結局酒でお金を使い果たし、また船に乗ってしまうという。この2人には意志の弱さという共通点がある。そしてまた陸の生活を良しとする気持ちがある。だから *Chris* ではクリスはアンナがミネソタ州の農場に居ることを喜んで居る。こうした意志の弱さをクリスは海への憎しみに転化してしまうのであるが、他に彼が海を憎む理由として彼自身の話によれば彼の一族は海で死に、妻や子供達にはめったに会えず、2人の息子が家の近くでおぼれて死んだ時も航海に出ていて帰れなかったということがある。(*Chris* p.27) この話は *Chris* では2か所(ミッキーやデブリンに対してとアンナに対して)で言われているのに対して *Anna* ではアンナに話す1か所だけである。以上クリスについて述べてきたが、この2作品における彼についての変化はあまり見られない。

②バーク (アンダーソン) について

この2作品の主な登場人物の中で同じ役割(アンナと結婚する)をするこの2人は名前も性格も立場もまったく変化している。*Anna* のバークはアイルランド人で汽船の火夫をしている。彼は前にも述べた *The Hairy Ape* の主人公ヤンクに似ている。これに対して *Chris* のアンダーソンは大学を中退した2等航海士で作者オニールを思わせる人物である。さてこの2人の描写を較べてみよう。まずバークである。

He is a powerful, broad-chested six-footer, his face handsome in a hard, rough, bold, defiant way. He is about thirty, in the full power of his heavy-

muscled, immense strength. (p.183)

次はアンダーソンである。

He is a tall, broad-shouldered, blond young fellow of about twenty five with a strong-featured, handsome face marred by a self-indulgent mouth continually relaxed in a smile of *lazy good humor*. His blue eyes, large and *intelligent*, have a *dreamy*, absent-minded expression. (p.82)

このようにパークは粗野でたくましく、アンダーソンは知的だが夢想家に描かれている。同じ役割の人物に対してこれだけ対照的な人間を配置したのは、アンナの設定と大いに関係がある。Annaにおけるアンナは売春婦という役柄だし、Chrisにおけるアンナはタイピストを目指す教養ある婦人という役柄である。これに合うように作られているのである。2人の言葉にしてもアンダーソンの英語は標準的な英語であるのに対して、パークの方はアイルランド人だけにかなり標準から逸脱している。次のこのパークの言葉の特徴について列記する。

1. It's~の多用

(例) if *it's meself* do be saying is (p.187)

2. 現在完了の役目をする after~ing の使用

(例) Divil a wink *I'm after having* for two days and nights (p.186)

3. let を用いた命令文の多用

(例) *Let you not be making* game of me. (p.187)

Let you take it. (p.223)

4. and+Subject+predicate without verb の多用

(例) *and me tormented* with thoughts (p.257)
and me sitting down here (p.211)

5. 習慣を表わす~ing 形

(例) I *do be forgetting* it at times (p.191)

6. 進行形の多用

(例) I'll *be telling* you a bit of myself, and you' ll *be telling* me a bit... (p.191)

7. 関係詞の省略

(例) The sea's the only life for a man with guts *in him isn't afraid of his own shadow!* (p.214)

これはクリスと似ている。

8. the like of+人の多用

(例) *A tirrible end for the like of them swabs* does live on land, maybe. (p.194)

9. 間投詞の多用

(例) Glory be to God, God stiffen you, God help you, Thank God, God forgive them, God help us, for the love of God, God bless you, God be praised, Divil mend you, God mend you, Glory be, God's curse on you

10. Name-calling (悪口) が多い

(例) me old buck!, ye old ape?, stock-fish-swilling square-heads ever shipped on a wind-bag, ye old baboon (以上はクリスに対して), shriveled swabs (都会人に対して)

クリスのこういう面は *A Moon for the Misbegotten* におけるホーガンと似ている。⑩

11. アイルランド英語独特の表現

The back of my hand to you, whisht

12. surely の多用

13. 発音の変化

(1) [i] → [ei]

(例) decent → dacent, indeed → indade

(2) [i] → [e] 又は逆

(例) queer → quare, ever → iver, devil → divil

14. 代名詞の変化

(例) my → me, those → them, he → himself

15. これが特にクリスと対照的なのであるが、クリスは to 不定詞を使わないのに対してパークは反対に良く使う。

(例) You to be what you are, and me to be Mat Burke, and me to be drove back to look at you again! (p.255)

谷口次郎氏によればアイルランド英語では to 不定詞が and を伴ってだらしく使われるという。⑪これに対してアンダーソンの英語は次のせりふに代表されるようにクリスと対照的である。

Heredity might account for me, too. I've often wondered if it could be that; for my case is similar to yours-I mean, I was born and bred inland. (p.97)

このアンダーソンは前にも述べたようにオニール自身をモデルにしたようで大変ナイーブな人間となっている。例えば彼は何物にもしばられない自由を望む。そのため責任の軽い2等航海士のままでいたいと言う。クリスと同じく逃避的な態度である。彼の次のせりふは *Long Day's Journey Into Night* のエドマンドのあの海での体験を

述べたせりふと似ている。つまり分詞を連続的に使用しているのである。

Freedom-that's life! No ties, no responsibilities-
no guilty feelings. Like the sea-always *moving*,
never *staying*, never held by anything, never *giving*
a damn-but *absorbing, taking it all in, grabbing*
every opportunity to see it all- (p.101)

このアンダーソンの父親はスウェーデン人のアメリカ移民で彼はミネソタの農場で生まれた。(これは *Anna* のアンナの境遇と似ている)しかし農場の生活が嫌で、大学まで進んだが2年で中退してそれから各地を放浪したりしたが船で働いたのが気に入って、そのまま船員になったという。かなり経歴的にもオニール自身のと重なっている。また農場と海という対比はこの作品の前に書かれた *Beyond the Horizon* にも出てくるものである。こういう消極的な生活を送っていたアンダーソンだがアンナと恋することによって変わっていく。船乗りと結婚してまた母親と同じような待つだけの人生を送りたくないというアンナにアンダーソンは船長になれば妻を同伴して行けるのだから船長になるために頑張ると言う。

これに対してバークとアンナの方はクリス一族の不幸をくり返すことが十分想像される。バークは火夫のままであろうし、そうすればアンナは母親と同じように待つ生活を一生送らなければならないであろう。バークは前にも述べたように *The Hairy Ape* の Scene One におけるヤンクに似ている。自らの存在意義に疑いを持たず、またクリスの言うような海が人間を支配するという考え方にも同意しない。彼自身も自分が猿のようだと認めている。('Tis a clumsy ape I am p.191)

彼は海の生活は自由であり何物にも束縛されないと言う。

'Tis only on the sea he's free, and him roving
the face of the world, seeing all things, and not
giving a damn for saving up money, or stealing
from his friends~ (p.214)

しかしラストではクリスと同じ船に乗ることになったことでクリスの考えを認めるようになる。こういう面はアンダーソンには見られない。James A. Robinson は海はキリスト教の神のようにバークに教訓を与えたと述べている。そして彼はバークだけでなくクリスやアンナも海という大きな力 (a larger unity) によって超自我の世界に導かれると言う。⑫

またアンダーソンが品が良いのに対してバークは大変品が悪く、アンナに会った最初は彼女を売春婦だと思っ

てすぐに彼女にキスをしようとするが、クリスの娘だと知って彼女を“Miss”と呼ぶようになる。しかし後で売春婦だったことを知りショックを受ける。このバークがアイルランド人であることを考えるとこの辺りは Harry C. Cronin の言うアイルランド人の純潔を求める気持ち (the ideal of sexual chastity) を表わしているのではなかろうか。⑬ Cronin によればこれは Virgin Mary 崇拜から来ており、この気持ちが満たされない時売春婦 (例えば *Long Day's Journey Into Night* における Fat Violet のような) によって身を汚す (desecrate) という。Fat Violet についてジェイミーは次のように述べている。

With no dishonorable intentions whatever. I like them fat, but not that fat. All I wanted was a little heart-to-heart talk concerning the infinite sorrow of life. ⑭

こういう太った売春婦は *The Great God Brown* に出てくるシベルもそうである。 *A Moon for the Misbegotton* におけるジョージも最初は遊び女と見られていたが実は処女であったことがわかるという点から彼女達と関連して考えられる。このジョージと対照的にアンナは売春婦であったが、バークとの愛によって生れ変わる (純潔になる)。

さてバークは生まれ変わったと主張するアンナの前に、ポケットから古くて安っぽい十字架を出し、その前で今までにバーク以外の男を愛したことはないということ、今までの悪業は忘れ2度としないこと、を誓わせるが実はアンナがルター派 (つまりバークのカトリックとは合わない) であることがわかる。しかしバークは結局アンナとの愛の方を取る。このように彼には運命に向かっていくバイタリティがあり、ジョージの相手のジムやシベルの相手のダイオンと対照的である。彼はアンナと同じく children of the sea であり belong する場を持っている。 *Chris* におけるアンダーソンは対照的にジムと似ている。彼はアンナに会うまで逃避的な生活を送っていたのである。しかしアンナと出会ったことで変わる。

Why, I never knew the real myself till I knew you, Anna! Before that I just drifted with the tide, and let things happen. (p.138)

⑬ アンナについて

アンナについてはこれまでたびたび言及してきたが、まずその外見についての描写を比較してみる。

She is a tall, blond, fully-developed girl of

twenty, handsome after a large, Viking-daughter fashion but now run down in health and plainly showing all the outward evidences of belonging to the world's oldest profession. (Anna p.151)

She is a tall, blond, fully-developed girl of twenty built on a statuesque, beautifully moulded plan-a subject for a sculptor with the surprising size of her figure so merged into harmonious lines of graceful youth and strength as to pass unnoticed. ... Only her wide blue eyes betray anything of the dreamer. (Chris p.37)

Annaにおけるアンナの方がChrisにおけるアンナより描写が簡単であり、ただ売春婦で刑務所を出たばかりのためか疲れた様子が見られるということがわかる程度である。これに対してChrisのアンナの方は彫像のような神聖さとその調和のとれた大きな体、そして夢想家の目が強調されている。ここで注目すべきことはアンナの描写とA Moon for the Misbegottenのジョージの描写が似ていることである。

She is so oversize for a woman that she is almost a freak-five feet eleven in her stockings and weighs around one hundred and eighty. ⑮

このジョージのように具体的な数字で示されているわけではないがChrisのアンナもかなり大きい女性である。彼女達の共通点はどちらも相手の男性を救ったり勇気づけたりする所である。勿論ジョージの方が深い意味を持っているが、またAnnaのアンナとジョージの類似についてはあとで述べる。

さてこの2人のアンナの違いであるが、それはまず2人の最初の言葉でわかる。Annaでは彼女は港のバーに入って来て酒を注文する。

Gimme a whisky-ginger ale on the side. (p.151)

彼女はその上たばこまで喫う。若い女性が酒場に入って酒を注文したり、たばこを喫うということは当時の社会では非常識なことであり、観客に強く印象づけたことは疑いのないことであろう。それはバーテンのラリーさえ驚ろくことからわかる。これに対してChrisではアンナはクリスの船にやって来てきちんとした英語で次のように言う。

It's so good to see you, Father-at last-after all these years. (p.38)

この時アンナは自ら進んでクリスにキスするのであるが

Annaの方ではクリスの方からアンナにキスするし、この時2人の中には少しためらいが見られる。これはアンナには売春婦になったのはクリスのせいだという思いがあるであろうし、クリスの方にはアンナを放っといううしろめたさがあったからであろう。そのためChrisにおける両者の関係より深刻なイメージを受ける。前者の言葉からもわかるように2作におけるアンナの英語にはかなり違いがある。Chrisの方ではきちんとした英語なのにAnnaの方ではクリスやパークほどではないが標準からはずれた英語を使う。

1. [d]が[y]になる。これはクリスと同じである。

(例) janitor → yanitor, just → yust

2. 文法的まちがい

(例) I seen you was the same (p.236)

3. 間投詞の多用 (ののしり言葉)

(例) damn it, God damn 'em, Like hell, Gee, Gawd, Good Lord, for Gawd's sake

特にGawdが多く使われる。これらはアンナが品の悪い女性(売春婦)であることを示している。また父親ゆずりの癖でもあろう。Chrisよりこの作品の方が父と娘のつながりは深い。

4. 2重否定表現 (又は3重否定)

(例) I'll never blame you for nothing no more

2作におけるアンナの変化で最も大きいのはChrisのアンナはタイピストを目指す教養ある女性であるのに対してAnnaの方では元売春婦という設定に変化したことであろう。そして2人とも海と接することによって自己を発見する(belongする場を見つける)という点では一致するけれども、元売春婦という設定の方がそれだけ効果が大きいように思われる。その時の状況は両方とも霧(fog)の中であり、Chrisのアンナは次のように言う。

I love the fog. It's so ... strange-and still. I feel as if I were-out of the world altogether. (p.59)

これに対してAnnaでは次のように言う。

I love this fog! Honest! It's so... Funny and still. I feel as if I was-out of things altogether. (p.174)

オニールの劇の中で霧が重要な役目をするのはLong Day's Journey Into Nightにおいても同様である。この作品の中で霧に言及しているのはエドモンドとメアリーであり、メアリーにとっては霧は“自分を世界から隠してくれる物”としての意味が強く、エドモンドにとっては“あるがままの現実を見ないですむようにしてくれる物”とい

う意味を持っている。エドモンドは父親に霧の中での体験について次のように話す。

Everything looked and sounded unreal. Nothing was what it is. That's what I wanted to be alone with myself in another world where truth is untrue and life can hide from itself. ⑯

彼らの見方に対して *Chris* のアンナの見方は比較的単純な物であるが、それは彼女自身それだけ深い絶望感を味わっていないからである。彼女はイギリスのリーズの親戚に預けられたが彼らはアンナを娘同様にかわいがってくれた。ただその家が宗教的にあまりに厳格であったので息がつまった彼女は自由を求めてアメリカにやってきたのだ。これに対して *Anna* のアンナの境遇は大変みじめである。彼女はアメリカのミネソタで農場を持つ親戚に預けられたが奴隷のように扱われ、その上いとこのポールという男に強姦されたという。その果てに彼女は売春婦となり捜捕されて刑務所にまで入った。それ故彼女には男性に対する憎しみが強くある。そんな彼女にとって霧は“身を清めてくれる物”としても重要な意味を持つ。これは他の人物に見られないものである。彼女はクリスに次のように言う。

It makes me feel clean-out here-'s if I'd taken a bath, (p.175)

Chris に較べてこの作品の方がアンナにとって霧の果たす役割が大きいことがはっきりわかる。霧による救い (redemption) が *Anna* においてははっきり出ている。この霧だけでなくパークへの愛も彼女を生まれ変わらせた彼女が告白する。こういう彼女を見ると Raleigh が言ったようにアンナは売春婦でありながら心は清らかであることがわかる。⑰そういう意味で処女 (virgin) と言える。先にも述べたようにオニールの作品の女性には Virgin Mary 的女性が出てくる。例えば *A Moon for the Misbegotten* のジョージである。アンナの父親クリスが劇中で歌をよく歌うけれどその歌詞の中でジョージという女性を賛美しているのも意味深い。

My Yosephine, come board de ship. Long time Ay wait for you. De Moon, she shi-i-i-ine. She looka yust like you. Tchee-tchee. Tchee-tchee. (*Chris* p.147)

アンナとパーク、又はアンダーソンの愛の場面も月夜である。*A Moon for the Misbegotten* におけるジョージとジムの愛の場面も月夜である。このようにジョージとアンナはかなり似ているが、しかしジョージに較べ

たらアンナの方が観客に訴える力が弱い。それはジョージにはジムを救うという大きな愛があるからである。それに対してアンナとパークの間にはそんな物は存在しない。むしろアンナの方が救われていくのである。そういう意味では Virgin Mary 的な面はジョージの方が強いと言えるだろう。

終わりに

以上 *Chris* と *Anna* の比較をさまざまな点から検討してきたがやはり後者の方がドラマチックでありより優れていると言わざるを得ない。オニール自身はクリスの海への憎しみに興味があったようであるが、*Chris* の方ではそれはラストで解消されたようである。しかし *Anna* の方ではまだそれは余韻として残っている。幕はおりても劇はまだ続くのである。この2作において人間は肯定的に描かれていて他の作品と較べて明るささえ感じられる。*Chris* から *Anna* になって変わった点はいろいろあるが、その最大の点はアンナを傷ついた女性に変えることによって海そしてパークとの愛による浄化を大きなテーマにした所であろう。*Chris* の方ではアンダーソンがアンナへの愛によってそれまでの逃避的な生活から積極的な人生への決意をするのであるが、しかし *Anna* ほどのドラマ性はない。Travis Bogard は *Anna* の主題はニーチェの激賞した“ディオニソス的生への没頭” (a Dionysian immersion in life) であると言う。⑱クリスが最後にそうであったように運命から逃避するのではなく、それに従う方が良いというのである。しかしそれが人間の幸せにつながるにはオニール自身まだ確信していたわけではないのではなからうか。それはこの作品以後の作品を見て感じられる。ただ自然 (ここでは海) との融合の中で人間は幸せを感じるということは言えるだろう。これを幻想だとし運命に立ち向かっていったのがこの次に書かれた *The Hairy Ape* のヤンクなのである。

尚、*Chris* は Random House 版、*Anna* は Rinsen Book Company 版を利用した。

Notes

- 1) Margaret Loftus Randal, *The Eugene O'Neill Companion* (Greenwood Press)
- 2) Ed. by John Gassner, *O'Neill* (Prentice-Hall, Inc.) p.64

- 3) Travis Bogard, *Contour in Time* (Oxford University Press, Inc., 1972) p.159
- 4) 宇部工業高等専門学校 研究報告 第28号 pp.96~98
- 5) *The Hairy Ape in Selected Plays of Eugene O'Neill* (Random House) p.114
- 6) *Long Day's Journey Into Night* (Yale University Press) p.153
- I dissolved in the sea, became white sails and flying spray, became beauty and rhythm, became moonlight and the ship and the high dim-starred sky !
- 7) Normand Berlin, *Eugene O'Neill* (The macmillan Press Ltd. London, 1982) p.63
- 8) John H. Raleigh, *The Plays of Eugene O'Neill* (Southern Illinois University Press, 1965) p.159
- 9) *The Long Voyage Home*, *The Plays of Eugene O'Neill* (Rinsen Book Company) p.67
- 10) 宇部工業高等専門学校 研究報告 第30号 pp.97~98
- 11) Jiro Taniguchi, *Irish English* (Shinozaki Shorin, 1972) p.102
- 12) James A. Robinson, *Eugene O'Neill and Oriental Thought* (Southern Illinois University Press, 1982) p.97
- 13) Cronin Rev. Harry Cornelius, *The Plays of Eugene O'Neill in the Cultural Context of Irish American Catholicism* (University Microfilms International) p.31
- 14) *Long Day's Journey Into Night* op.cit., pp.159~160
- 15) *A Moon for the Misbegotten* (Vintage Books) p.1
- 16) *Long Day's Journey Into Night* op.cit., p131
- 17) John H. Raleigh, op.cit., p.120
- 18) Travis Bogard, op.cit., p.164

(昭和61年10月8日受理)